

かげろふの日記の副詞に関する一考察

柿 谷 雄 三

七八

かげろふの日記に見える副詞中特に擬声擬態副詞には、つぎのときものがある。

うらうらと	一例
こほこほ・こほこほと	四例
さくりもよよと(に)	三例
さらさらと	一例
しかしかと	一例
ししと	二例
しづしづと	一例
そよそよ	一例
つぶつぶと	三例
つくつくと	七例
つやつやと	一例
はたはたと	一例
はるはると	四例
ひとく／＼と	一例
ひやうと	一例

ほのぼのと	二例
ほろほろと	二例
みしみしと	一例
むらむら	一例
よひそ／＼と	一例
よよと	一例

この中で、本日記にのみ用例を見るものは、「ししと」「ひやうと」「よひそ／＼と」であるが、今は「ししと」「よひそ／＼と」「つぶつぶと」の三語について考察して見たい。

一 ししと

「ししと」については次の二例がみられる。

(一)もの言はであれば、人などみな出でぬと見えて、この人(かへ)は歸りて、
(道綱)「御送りせむとしつれど、汝(きんち)は呼ばむ(底本「よらん」、川口久雄氏は「よからん」と校訂)時にを来、とておはしましぬ」としてししと(底本「ししと」)泣く(底本「て」とよまれる)
(宮庁本文の原題を本文の右に(一)内をもつて表示した。以下同じ)

めにやって来る件で、ここは作者の妹ともう一人(喜多・川口両氏ともに「をば」を指すものと見ていられる)が、訪れて「里で想像していたよりも一層心細く思われる」といって、「ししと」泣いたというのである。

さて「ししと」という語はわたくしの貧しい調査によると、竹取物語、土左日記、枕冊子、紫式部日記、和泉式部日記、更級日記、讃岐典侍日記には用例なく(いずれも先学の総索引による)、源氏物語にすら一例も見出されない。(「源氏物語大成」による)他の同時代の作品も管見の及ぶ限りでは見当たらないようである。また各辞書類もこの語を採っておらない。

そうすると(一)このあたりは特に本文に疑義が多いところから、何かの誤写であってこの語の存在すら疑わしいのではないかと考えられるが、あるいは逆に(二)他の書物に見られないめづらしい例が本書に残っているのではないかとすることも想定されよう。今しばらく両面の立場から考察を進めてみることにしたい。

そこで「ししと」という語の修飾語であるが、もし今日みられる「しくしくと」の古い型であるとするならば、「泣く」という語にかかるより他はまず用いられないであろう。しかし、この場合、先にも記したように写本類には二例とも「なて」とよまれ、(一)は「し」となて(「ただし「て」は「天」の草体で「く」に近い字形)(二)は「志」となてとなっているから、語の用例と数えるにはやや文獻的に躊躇させられるのであるが、く↓の誤写の可能性は大きいし、ひとまず「なく」の誤写とみても大過ないであろう。

さて「泣く」という語の修飾語としてよく用いられるものには、

かげろふの日記の副詞に関する一考察

七九

(中巻 日本古典全書二三九―二四〇頁 日本古典文学大系二二三頁)
(一)わがもとのほらから(底本「我もなほらから」川口氏は「我がはらから」と校訂される)一人、また人も歸りもの(底本「かへりもに物」)したり。はひ寄りて先づ、(蘇)「いかなる御心地ぞと里にて思ひ奉る(底本「さとりて思ひかたてまつひ」)よりも、山に入り立ちてはいみしくものの覚え侍る(底本「はへる」川口氏は「はるくる」と校訂される)ことなく(底本「て」)ふさずまるなり」とて、ししと(底本「し」と)なく(底本「て」)

以上のごとく、(一)は特に本文に疑問なところが多いから、そのこともよく考慮に入れなければならないであろうが、一往、喜多義勇、川口久雄両氏の校訂された本文に従うこととした。

そこで(二)もともに天禄二年六月の鳴滝山籠の一節であって、(一)は参籠を始めて間もなく、兼家が作者をつれもどそうと迎えに行くところである。兼家は物忌みのため車から降りられず、石段を隔てて作者に下山を勧めようとする。その二人の間の連絡の役を道綱がやらされるのであるが、作者は頑として下山を聞き入れない。とうとう兼家の方が根負けして帰えりかけるが、道綱は反目しあった両親の間にはさまれて実に苦しい思いをする。そして父を送って車に乗って行こうとするが、すっかり不機嫌になった兼家は「汝は呼ばむ時にを来」といい残してそのまま帰ってしまう。そこで道綱はとうとう「ししと」泣きくずれたというのである。

(二)の方はこのようにして参籠を続けた作者のところへ、人々が慰

どのような語があるかという、

イ「さくよりもよに(と)」

ロ「よに(と)」

ハ「しほしほと」

ニ「ほろほろと」

などがあげられるが、^{※1}この中で擬声語からきたものといえはイロをあげなくてはならない。イは本日記に三例、ロは一例を数える。

そこで学習院大学蔵本の契沖書入のごとく、^{※2}「し」と「よ」の字体の類似から「よ」と「し」の誤写ではないかという考えも生まれて来るのである。坂秋斎の「かげろふの日記解環」もこれに従い、二例とも「よ」という本文を採用している。しかし、写本類にはすべて「し」とあるから、にわかこれに以て是ともなしがたいようである。

ところで今日の「しくしくと」の語はいつ頃までその用例を溯ることができるかという建礼門院右京大夫集に

「かく思ひしことと思ひ出づべき人も無きが堪へがたく悲しくて、しくしくと泣くより外のことぞなき」

(佐々木信綱博士校富山房百科文庫一〇〇頁)

とあるのが最も古いようである。これは時代が下るものであるけれども、右京大夫集の頃にはじめて「しくしくと」という鳴咽の擬声語が生み出されたとは考えられず、「しくしくと」のくりかえし形以前にむしろ「し」と「しくと」の形があったとも考えられよう。すなわち「し」「く」はよく誤られやすいから、「ししと」は「しくと」の誤でないかということも、あながち否定し去ることはでき

ないのではなからうか。また擬声語なるものはその造語力が比較的自由であり、変化の多い語であるから、自由に作られた亡んでゆくことも考慮に入れねばならないであらう。

そこで本日記においては、擬声語の比較的豊富であることも一つの支えとなって、「し」と「しくと」いずれにしてもこの語の存在は一往認めるのが妥当ではないだろうか。従来の「ししと」「よ」と説以外に「しくと」説をかりに提出してみる次第である。

注※1「源氏物語大成」によると、

イ「さくよりもよに(と)」

ロ「よに(と)」

ハ「しほしほと」

ニ「ほろほろと」

涙

二例

六例

八例

※2「平安文学研究第二十二輯」上村悦子氏校訂による

よゝか しゝとなく(一五三頁) 下にも此言あり

二 よひそく(と)

つつましき人の気近く覺ゆれば、やをらかたはら伏して聞けば、

蟬の声いと繁うなりたるを、おぼつかうてまだ耳を養は

ぬ翁ありけり。庭掃くとして、筆を持て木の下に立てるほどに、

にはかにいちはやう鳴きたれば、驚きて振り仰ぎて言ふやう、

「よいぞよいぞと(底本「よひそく」と) いふなは蟬来にける

は、虫だに時節を知りたるよ」とひとりごつに合はせてしか

しかと鳴き満ちたるに、をかしうもあはれにもありけむ心地ぞあ

らう

(ちあち)

(下巻 日本古典文学大系 二八二頁)

右の文は天禄三年六月の条である。「つつましき人」(妹の婿であらう)が来ているらしいので作者がそと伏している、折から蟬の鳴き声がしきりにして来た。庭を掃いている耳の遠い老人がふいに頭上の木で鳴き出した声に驚いて「もうよひそく」というなは蟬がやって来たよ。虫さえも時節をよく知っているわい。」と老人らしい感慨をもたらずと「しかしか(そうだそうだ)」と蟬がそれに答えるように鳴いたというユーモアなひとくだりである。

ところで、蟬の鳴き声の擬声語として「かげろふの日記解環」以来、「よいぞく」と濁って読まれて来たこの本文は、はたしてそれでよいであらうか。またそのような語が認められてよいのであろうか。まず本文の筆跡を検するに、

宮内庁本 よむふく(と)

(下十七丁ウ)

山脇穀博士本・元禄板本 よひふく(と)

(山脇本下二丁ウ)

とあって、まず問題はなさそうである。ただ「解環」の本文に「よいぞく」といふてなくせみ木にをるはむしだにじせちをしりたるよ」と作っているのは改意が過ぎるといわねばならないだろう。

そこでこの語についてはまず「よいぞく」とそのものの検討と、その声を発した「なは蟬」との二つの面から考えていきたい。

まず辞典類は「よいぞく」とは採っておらず、大言海より最近の角川古語辞典に到るまで見出しえない。しかし「なは蟬」の方は和名抄の「雌蟬 奈波 雌蟬 不能鳴者也」(大日本国語辞典など)を

かげろふの日記の副詞に関する一考察

引用し、「セミ類の雌の称。鳴かない蟬」(同上書、三省堂古語辞典、角川古語辞典など)としてかげろふの日記の用例を示しているが、この文を読んでみると、ごろ蟬ではおかしいようである。

つぎに注釈書には

1(解環)

原本ノよひふくトアルヲモトヨリ。此原本いひノカナノタガヘルサマハ往々ミユレバ。今ハソノよひフイノカナニシテ蟬ハ平声。善ハ上声。声ノカハリハアレド本同母同音ノ字ナレバ。今ハ本実ヲ失タル蟬ノ字音ニ翁ガ言ニトリテ。セミノトナクヲ善トトリテ。善ノ字ノヨミノ方ニツイテ。ヨイゾノトイフテ鳴セミト。翁ガ蟬ニムムカツテヨバ、ルナリ。又此一件ニヨヒノ義用ナシ。其ヨヒゾノトイフテ下ニ。テラクハヘタルハイヅレノ本ニモアリ。

(下巻之五、八丁)

2(吉川理吉氏「王朝文学叢書」)

「宵ぞく」——宵に鳴けよの意か。(頭注) 蟬が来てしまったは。虫でも時節を知ってゐるよ。

(二〇五頁)

3(池田亀鑑博士「物語日本文学」)

よしよしといって鳴く蟬が来たのは虫でさへ時節を知ってゐるよ注 つくつくはうしは「うつくしよし」と鳴くといふ。ここに抱りし本文は「よいぞよいぞといふて鳴く蟬」(筆者曰解環の本文であらう) 他説あるも不詳。

(下・六九—七〇頁)

4(喜多義勇氏「蜻蛉日記講義」改訂版)

「よいぞく」は蟬の鳴き声に擬したのである。「なは蟬」は和名抄に「蛭蟬作蟬二音和名奈波世美、雌蟬不能鳴者也」とあり、

披斎はそれについて「今掘玉篇云、蚱蜢声也如此則非瘧蟬明矣」といひ「爾雅所謂馬蟬、詩人所謂鳴蟬、月令礼家所謂蟬、本草所謂蚱蜢其美一種」といつてゐる。「馬蟬」は元末世美、俗に熊蟬又は山蟬といひ、蟬中最大者也と説明されてゐる。

(六三〇頁)

5 (川口久雄氏日本古典文学大系)

「本草云、蚱蜢奈波世美」(倭名)。熊蟬山蟬馬蟬ともいう。大きい蟬。

(二八一頁)

などとあつて、「よいそ／＼」については、(一)「善いぞ／＼」を掛けたとする説(解環・池田亀鑑博士)(二)「宵ぞ／＼」を掛けたとする説(吉川理吉氏・与謝野品子氏)(三)単なる擬声語とみて掛詞を考へない説(喜多義勇氏)があり、「なは蟬」については、

(一)なく蟬と本文を改める説(解環・池田亀鑑博士)(二)蟬蟬説(和名抄、大言海、大日本国語辞典、吉川理吉氏)(三)馬蟬、熊蟬、山蟬説(寂斎、喜多義勇氏、川口久雄氏、山岸徳平氏、雅川澁氏、室生犀星氏)の三説がある。

これらの御説はそれ／＼傾聴すべき点があるが、決定的な結論を述べることはむづかしいようである。

「よいぞ／＼」については、「よひそ／＼といふなはせみ」の「いふ」の語勢から「よひそ／＼」が蟬の異名かのごとく感じられるが、その義はつまびらかにしたい。「よひそ／＼」の「ひ」を「い」になおしてしまふことも、なお考へねばなるまい。

そこで「よ」の文字を上につけ、「ひそ／＼といふ」ではないかとも考へられなくはないが、さすれば「ふりあふきていふやうよ」とも考へられなくはないが、さすれば「ふりあふきていふやうよ」

注※1 日本古典全書五四頁4行、一二七頁7行。

三 つぶ／＼と

つぶ／＼との語は次の三例がみられる。

(一)人はいとつれなう、「われや悪しき」など、うらもなり罪なきさまにもてないたれば、いかがはすべきなどよろづに思ふことのみ繁きを、いかてつぶつぶと(底本「つぶ／＼と」)言ひ知らするものにもがなと思ひ乱る時、心づきなきや。(川口久雄氏は「や」を入れない) 胸うちさわぎて、もの言はれずのみあり。(上巻 日本古典全書 一六〇頁)

(二)若き男ども「声細やかにて面やせにたる」といふ歌を歌ひ出でたるを聞くにも、つぶつぶと(底本「つぶ／＼と」)涙ぞ落つ。(中巻 日本古典全書 二〇五頁)

(三)あさましき人わが門より例のきらきらしうぶひ散らして渡る日あり。行ひしりたるほどに、「おはします おはします」とののしれば、例のごとぞあらむと思ふに、胸つぶつぶと(底本「つぶ／＼と」)はしるに、引き過ぎぬれば、みな(川口久雄氏「る」と校訂)人面をまぼりかへして居たり。われはまして二時三時までもの言はれず。(中巻 日本古典全書 二二七頁)

(一)は天徳二年の条で、道綱が片言に「今来むよ」という兼家のいつもの言葉をしきりにまね、また人々も作者に兼家と別れるよう勧

かげろふの日記の副詞に関する一考察

が解しにくく、「よ」を感動詞とみて(「や」といふ感動詞は本日記に二例ある)「よ、ひそ／＼といふなはせみきけるは」とも考へられるが感動詞「よ」は不自然であらう。さらに「よひ」と「そ／＼と」とを、わけて「そそ」という擬声語をも考へられようが、この場合「よひ」が「宵」でも「呼び」前後がつづかないようである。(なお、宮嶋弘先生より、「夜ひそ／＼となくはせみ」と解することもできようとの御教示をいただいた)。

結局、(三)の喜多氏の御説のように、単なる擬声語とみて蟬の鳴き声に近いと思われる「よひそ／＼と」と清んで、しかも「い」を「ひ」と読むのが最も妥当ではないだろうか。枕冊子「虫は」の段(四一段)にみえる簫虫の鳴き声の「ちちよちちよ」のごとく他に用例がないだけに若干不安を覚えるのである。

「なは蟬」については喜多氏の御指摘があつたごとく、「瘧蟬」ではあり得ないであらう。しかし、馬蟬、熊蟬、山蟬と考へてよいかは、なお考慮の余地があるのではなからうか。和名抄では蚱蜢は「なはせみ」として雌蟬の意としてゐるが、「蚱蜢」という語は「あぶらぜみ」を指すようであつて(上田万年博士「大字典」疑問が残る)に思う。ただこの場合いえることは、耳の遠い翁が驚いてふり仰いだというのであるから、よほど大きい鳴き声であつたらしく、馬蟬などの大きい鳴き声の蟬をさしていることには間違いないであらう。なお「しか／＼となきみちたるに……」とある「しか／＼と」も「然々と」という意味を含めた蟬の鳴き声の擬声語であり、成尊阿闍梨母集に見える「くつ／＼法師」とともに蟬の鳴き声の描写として、注目に値するものであらう。

めたりもする。しかし、一方兼家はいつこう平気で、「われや悪しき」といった情態であつた。そこで作者は自分のこの悩みを何とかして彼に知らせてやりたいものと「いかでつぶつぶと言ひ知らするものにもがな」といつてゐるところである。従つてこれは「つぶさに」とか「くはしく」とか「具体的に」「こまごまと」といったような意と考へられる。

(二)は中巻の天禄元年七月の石山詣の帰りの一文である。朝石山の僧と別れて舟に乗り漕いで行くと、折から残月、湖面のさざ波といったあたりの風物が作者の心を一層感傷的にさせた。そこへ若き男の「声細やかにて面やせたる」(川口氏は「声細にて」若い男が「面やせたる」と歌つた校訂される)という哀れな歌声を聞いた時、作者はもうたまらなくなつて、「つぶつぶ」と涙を落してしまつたというのである。それでこの「つぶつぶと」は擬態語であつて涙が「ぽたぽたと」頬を伝つて落ちたという意である。

(三)は中巻の天禄二年五月の条で、作者はそのころ、悪い夢に毎夜なやまされつづ、それでも兼家の来るのを待つともなく待っているといった複雑な心境であつた。すると召使の「おはしますおはします」との声に、彼女は「例のごとぞあらむ」と思いつつもやはり「胸つぶつぶとはしる」思ひであつた。そこでこの場合は「胸がどき／＼と動悸が打つ」という意と考へられる。

このようにこの日記の「つぶつぶと」の三例はそれぞれ語義を異にしてゐるようである。

座右の辞典類を見ると、大言海は、つぶつぶと(副)委曲委細ツバラカニ。ツブサニ。クハシク。コ

マゴマト。(用例源氏物語総角、夢浮橋、落窪物語三)
つづつと(副)(一)円カニ服レテ(用例源氏物語柏木など)
(二)鳴ル状ニ云フ語。(用例狭衣一上、浜松中納言物語三)

つづつと(副)(一)ツブヤク状ヲ云フ語。(用例落窪物語一)
下(二)血又ハ水ナドノ粒トナリテ出ヅル状ヲ云フ語。(用例宇治拾遺物語四、実方集、古今著聞集六)
(三)針ヲ刺ス音ナドニ云フ語。(用例宇津保物語一俊蔭上)
(四)つづだつ状ニ云フ語。

とあり、^{修訂}大日本国語辞典は「つづつと」を四項目あげ、はじめの三項目で、

委曲(副)くはしく。つまびらかに(用例蜻蛉日記上・上〔前掲ノ例〕、源氏物語総角)
円円(副)まるく肥えたるさまにいふ語。(用例源氏物語空蟬総角)

粒粒(副)①文字をすらすらとつづけずして、はなちがきに書くさまにいふ語。ぼつぼつ。(用例源氏物語、橋姫、夢の浮橋)
②水などの粒となりて、ほとばしり出づるさまにいふ語。

(用例宇津保物語国譲中、宇治拾遺物語四)
とし、さらに次の一項目で、漢字を示さず、

つづつと(副)①思ひせまつて胸さわぎするさまにいふ語。どきどき。(用例蜻蛉日記中、中〔前掲ノ例〕、源氏物語野分)
②泣くさまにいふ語。(用例宇津保物語国譲中、源

6 御かゝみなどあけてまいらする人はみ給ふみにこそはと心もしらぬにこしうみつけてきのふの色とみるにいとみしくむねつふ／＼となる心ちす (若菜下・一一九五頁)

7 あはれのこりすくなき世におひいつへき人にこそとていたきとりたまへはいと心やすくうちあみてつふ／＼とこえてしろう／＼つくし (柏木・一二五一頁)

8 いとよくこえてつふ／＼とおかしけなるむねをあけてちなとく／＼め給 (横笛・一二七九頁)

9 いみしうしろひかりうつしきことみこちよりもこまやかにおかしけにてつふ／＼ときよらなり (横笛・一二八二頁)

10 こよなうなげなき人の御心にもはへりけるかなとつふ／＼となき給ふ (夕霧・一三三八頁)

11 さま／＼かなしきことをみちのくにかみ五六枚につふ／＼とあやしきとりのあとのやうにかきて (橋姫・一五四一頁)

12 弁まいりて御せうそこもきこえたへてうらみたまふこととはりなるよしつふ／＼ときこゆれはいらへもし給はす (総角・一六〇三頁)

13 この人はみやわすれたまひぬらむこゝにはゆくゑなき御かたみにみる物にてなんなといとこまやかなりかくつふ／＼とかきたまへるさまのまきはさんかたなきにさりとてそのひともあらぬさまをおもひのほかにみつけれきこえたらむほとのはしたなさとおもひみたれて (夢の浮橋・二〇六八頁)

(源氏物語大成)の本文による)

のごとき十三例がみられるが、これらは(イ)女性や幼児の丸々とふく

かげろふの日記の副詞に関する一考察

氏物語夕霧)③針を刺し物を切り、又水に入る音などにいふ語。づづぶ。(用例宇津保物語俊蔭など)④ぶつぶつに同じ。)

と、より詳細に説いている。語義としてはこれに付け加えるべきものはないのであるが、これらの辞書に三乃至四にわけて解かれている「つづつと」とさらに「つづさに」「つづらかに」「つづらに」などはいずれもその語源を一にしているのではなからうかということについて少し考えてみたいと思う。

池田亀鑑博士の「源氏物語大成」の索引及び吉沢義則博士木之下正雄氏の「対校源氏物語新釈」の用語索引によってその全用例をみると、

- 1 むねあらはにはうそくなるもてなしなりとしろうおかしけにつふ／＼とこゑてそゝろかなる人の頭つきひたいつきものあさやかに (空蟬・八七頁)
- 2 かのむけにいきもたえたるやうにおはせしかひきかえしつふ／＼とのたまひし事ともおほしいつるに (葵・三〇二頁)
- 3 されはよおもひもよらぬことにはあらねといはけなきほとにうちたゆみて世はうき物にもありけるかなとけしきをつふ／＼と心え給へとをとめていて給ぬ (少女・六八一頁)
- 4 むつかしとおもひてうつふし給へるさまいみしうなつかしうてつきのつふ／＼とこゑ給へるみなり (胡蝶・七九六頁)
- 5 みしきき御木丁ひきよせてはつかにみゆる御そてくちはさにこそはあらめと思ふにむねつふ／＼となる心ちするもうたてあれは (野分・八七一頁)

よかな体つきを形容した例。「ボテボテ。」(1・4・7・8・9)
(何)胸の動悸を形容した例。「ドキドキ。」(5・6)までは先ず問題がないが、(イ)「具さに」「具体的に」「くはしく」の意と思われる例。(2・3・12・13)(ニ)「ぼつりぼつりと」「たどたどしく」の意と思われる例。(11)(ホ)「涙をはらはらと」の意と考えられる例(10)と考えるべきであると思う。

因みに、紫式部日記には
「^(イ)小さいふべきかたなる人の白う美しげにつぶ／＼と肥えたるが
の例があり、これは(イ)に相当するものである。また讃岐典侍日記に

は、
「何の事にかしのびやかにつづつとと申し聞かせ給ふ」

(岩波文庫二八頁)
とあって、(イ)の場合と考えられる。なお、竹取物語、土左日記、枕冊子、和泉式部日記、更級日記にはその例を見ない。

さて、「つづつと」の「つづ」は「つづら」と同じ語根を持つものであるが、その語源「つづ」は漢字をあてるなら、「粒」であろう。従って「丸いもの」というのが原義であり、それを繰り返した「つづつと」は「丸々した」の意と考えられよう。「つづら」に「つづら」も同じく「つづ(粒)」の形容動詞化であろう)そこで源氏物語や紫式部日記に見られた例はその擬態的用法といつてよいであろう。さらにその「つづ(粒)」のぶつづつした面は、(ニ)の「ぼつりぼつり」とか、「たどたどしさ」という面に形容され、一つの大きな連続したものに對する一つ一つ、言いかえると「箇々別

々、「さらには「具体的」とか「くわしく」とかいった意味も派生したものといえはしないであろうか。こう考えることが許されるならば、「つぶさに」「つぶらに」も語源的に「粒さに」「粒らに」が想定でき、「粒のごとくいちいち、こまごま」の意の由来がよく理解されるようである。これはいうまでもなく、(ハ)に属する用例より考えられる。また、「ぶつぶついう」とかさらに「不平をもらす」の意も、ぼつぼつと連続的にいうのであるから、「粒々」の擬態的用法の一つと見てよいのではなからうか。最後の(ハ)は涙滴の落ちる様の形容であるから、涙の水滴が目より流れ出る時や頬を伝う時に誰しもが感じまた見られる様子を、表現したものと解してよいであろう。(ハ)の動悸の場合も、胸中に小さい玉があつてそれがしきりに動きつづけるような実感——心臓の鼓動——、あるいは、ある間隔をおいて打つ形容と考えられよう。

このように「つぶ／＼と」という語は「粒」から来た擬態語であり、さらに「具体的」という意を派生したものといえるであろう。

かげろふの日記の三例の場合は、この源氏物語において帰納した(イ)より(ホ)までの五要素には比べるべくもないが、(ハ)の「つぶつぶと言ひ知らするものにもがな」は、「具さに」の意で、源氏物語の用例から帰納したところによると(ハ)に相当し、(ニ)の「つぶつぶと涙ぞ落つる」は(ホ)であり、(三)の「胸つぶつぶとはしるに」は動悸を形容しているのであるから、(ハ)の場合であつて、丸々と肥えた肉体の形容は、本日記にそういう場面が見られないところからその用例も見当らな。

※1 なお、宿木に、「心のうちのくるしきまでなりゆくさまを

つく／＼と(別本中桃園文庫蔵本及び湖月抄本つく／＼と)いひつゝけ給て」(源氏物語大成一七三九頁)というのがあるが、今は省くこととする。

——三二・三・一五、三四・七・三〇小補——

かげろふの日記の本文は疑問なところが多い。従つて語彙についての考察もよほど慎重でなければならぬ。ここに取扱つた小考は、本日記に見える擬声語副詞についての片々たる報告の一部に過ぎないが、一往朝日新聞社の日本古典全書本によりながらも、玉上琢弥・柿本斐阿氏の御厚意による宮内庁本、山脇毅博士の御厚意による博士御所蔵古写本、また架蔵の元禄十年刊本などの筆跡を比較参考しながら進めることができた。貴重な資料を貸与下さつた御厚意に対し深く感謝する次第である。

また終始御指導賜つた清水泰先生・宮嶋弘先生・田中重太郎先生に対して厚くお礼申しあげる。

古典解釈のための助詞の整理

長 田 久 男

はじめに

左の「整理表」を説明することが、本稿の目的である。つぎの三点をあきらかにすることを目標に説明したい。

古典解釈のための助詞の整理表

- 1 整理の構想と整理の基準について。
- 2 整理の構想及び整理の基準と古典解釈との関係。
- 3 整理表と通用の文法書の助詞分類との関連。

外にあらわれた特徴		働 き			文法の分類 で通用する
位 置	接 続	(第一類) 文の性質を変える	(第二類) 文節の任務を示す	(第三類) 表現者の気持を示す	
(甲) 文末だけに用いられる助詞	① 接続が定まつていない ② 活用語につく ③ 「も」につく ④ 終止形につく ⑤ 未然形につく ⑥ 連用形につく	ばや・なむ・ な①・ね・ な②・そ・ が・がな		か・かな・かも かし・な・③	終助詞